

薔薇の十字架

フィアンセの祈り

「この子がお前のフィアンセだよ。」

そう、父に紹介されたのは、自分よりも幼い少年だった。薄い金髪のボブヘアに、薄いブルーグレイの瞳。見た目はとても可愛らしい少女にも見えるその少年は、けれど、酷く冷めきつた表情をしていた。不愉快そう、とも言える。

「はじめまして、私はジョスリーヌ・ハイゼンベルクと申します。」

微笑みを浮かべてそう名乗ってみたけれど、少年はその冷めた顔を変えることはなく。けれど完全に無視するわけでも無くて、小さな声で「パトリス・ベルリオーズ」と名乗ってくれた。

これが、私とパトリスの出会い。

今だから言えるけれど、最初はなんて不愛想な子なのだろうと本当に心から思った。けれどそれだけではない子なのだ、私は知る。それは彼が母親と会っているときに見せる顔を見たから。穏やかで、幸せそう、で、年相応の柔らかな笑顔。病に臥せった母を労わり、愛し、慕う。本来の彼はきつとそういう子なのだ。それが分かった時、私は彼を私なりに理解してみせようと思った。私の前では決してあんな柔らかな顔は見せてくれないだろうけれど、それでも構わない。私なりに、いこう。そう決めた。

「僕のあとをついてまわらないでくれない。」

そう何度冷たく言い放たれたか分からない。それでもくじけず彼に寄り添ったのは、フィアンセだからではない。多分、私の中に彼への愛情がそれなりに芽生えていたのだろうと思う。ただそれは、いわゆる「恋愛」とは少し違ったと思う。どちらかというと母性愛に近いもの。私はそう解釈していた。

彼はずっと孤独だった。学友もいないようで、学校が終われば真直ぐ家に帰ってくる。そして母親のもとへ一直線に向かう。そこできつと幸せな会話を交わして、それが終わったら私に話しかけられてきつと不快な気持ちになっている。それが分かっているけれど、でもある意味意地になつていたような気がする。私は

彼を理解したかった。彼がどんな人間で、どんなことを考え、何を愛し、何を憎むのか——憎しみの対象に、私は恐らく入っていたらと思う——。

こんなふうに人を理解したいと思ったのははじめてのことだった。パトリスと出会う前、私には想い人がいた。私より年上で、頼りがいのある……私のお屋敷で働いていた青年だった。彼はとても気さくで優しく、そして心がとても読みやすかった。だから彼も私を愛してくれていることにはすぐ気づいた——でも、私は、父の言うままに生きなくてはならない。そう生きる決めてしまっていた。だから、想いを告げなかった——。でもパトリスは違う。心が読めそうで、読めない。だから読みたいと、知りたいと、ただ純粹にそう思ったのだ。

いつか、彼の心を本当の意味で理解してくれる人は現れるのだろうか。私のように、必死に、彼に冷たくあしらわれるほどしつこくつき纏わなくても、彼をすぐに理解し、愛してあげられる存在が。

もしそんな人が現れたのなら……私はその人に、彼を託したい。彼を幸せにしてくれるのであれば、彼の笑顔を引き出してくれるのであれば……。

そんな人が現れることを、私は切に願う。
きつと私は、そういう存在にはなれないから。

いつかパトリスが、幸せになれますように。

——その願いが叶うまで、あと×日。